

京都部落問題 研究資料センター通信

第33号

発行日 2013年10月25日（年4回発行） 編集・発行 京都部落問題研究資料センター

2013年度 部落史連続講座 II

第1回 11月22日（金） とめおかこうすけ 留岡幸助と部落改善論
講師：関口 寛さん
（四国大学准教授）

第2回 11月29日（金） たかたやすま 高田保馬の身分・階級・民族論
講師：田中 和男さん
（龍谷大学非常勤講師）

第3回 12月13日（金） うるはけんりゅう 漆葉見龍と
京都市社会行政をめぐる人々
講師：杉本 弘幸さん
（京都工芸繊維大学・佛教大学非常勤講師）

* * * * *

時 間 午後6時30分～8時30分
場 所 京都府部落解放センター3階 第2会議室
参加費 無料

～参加希望の方は前日までに電話・FAX・電子メールで連絡ください～

戦後マイノリティ研究と

西成情報アーカイブ

吉村智博

(近代都市下層社会研究者)

戦後史に関わる文献（講座、シリーズ、単行本など）の並んだ自宅の本棚に目をやっていると、やはりここ数年の業績や成果が際立っていることに気づく。かつて戦後五〇年を記念して一九九五年に刊行された中村政則ほか編『戦後日本・占領と戦後改革』（全六巻、岩波書店）など当時精力的に読み込んだ作品は本棚の隅の方に追いやられてしまっていて、テーマとしては社会、生活、地域など、時期としては高度経済成長を銘打ったものが前面に出てきており、研究の深化をあらためて感じる（もちろん強烈な主観なのが・）。

なかでも近年の歴史認識と歴史叙述のあり方に大きな影響を与えているのは、①成田龍一ほか編『戦後日本スタディーズ』（全三巻、紀伊國屋書店、二〇〇八～〇九）、②大門正克ほか編『高度成長の時代』（全三巻、大月書店、二〇一〇～一一）、③安田常雄編『シリーズ戦後日本社会の歴史』

（全四巻、岩波書店、二〇一二～一三）の三シリーズであろう。①は、「戦争前夜とも言えるいま、あらためて「戦後日本」を総体として捉え直し、一つひとつの事実を、二一世紀の視点から歴史化する営みが、これから生き抜くうえで不可欠」（「はじめに」）な態度であるとの認識から、戦後日本を二〇年ごとに時期区分（四〇・五〇年代、六〇・七〇年代、八〇・九〇年代）し、思想、文化、教育、運動など多角的な視座から照射しようとしている。②は、高度成長の時代の歴史的特質を段階的に把握すること、成長と冷戦を「地域の側から問い直すこと、成長と冷戦を「暮らしと思想」の側から問い直すことを目的に「複数の視点や動態的な変化を把握する視点が不可欠」（「シリーズ「高度成長の時代」刊行にあたって」）との認識から当該期を描き出そうとする試みである。③は、戦後日本がかかえてきた「分断と画一化へ導く強

い力」と「人びとのつながりを結び直し、回復しようとするさまざまな試み」の双方に焦点をあて「戦後日本の多層にわたる問題を考えること」（「刊行にあたって」）を旨として編集された。

いずれも多彩な執筆陣を配し、多様な論点を提示しており、あらためて歴史学、社会学、教育学、政治学、経済学の各分野において深化した方法論による相互領域への浸潤と、私たちが生きる同時代がまさに研究対象となりうることに刮目させられる。もとより、「戦後日本の歴史的研究を共通の基盤とする新たな知の集団」（「設立趣意書」）として同時代史学会が設立されたのは二〇〇三年であるし、「戦後」そのものを言説化してきた国民国家のナショナルヒストリーを相対化した西川祐子編『戦後という地政学』が「歴史の描き方②」としてそのシリーズの一冊に加えられたのが二〇〇六年。国立歴史民俗博物館が総合展示第六室「現代」の開室に先立って、公開フォーラム「高度経済成長と生活変化」を開催したのは二〇〇九年のことであるから、すでに戦後史、いな同時代史は、私たちの研究対象として定着しているといえるだろう。

ただ、こうした傾向にたいしてやや批判的な視点でみるならば、いずれのシリーズもマイノリティの視点からするアプローチが弱いといったことが指摘できよう。②の第三巻「成長と冷戦への問い」において、スラム、沖繩、女性を対象とされ、③の第四巻「社会の境界を生きる人びと」において、在日コリアン、沖繩人、被差別部落民、被爆者の運動や生活が取り上げられてはいるものの、マイノリティ研究の蓄積からすると、テーマに少しばかり偏りがみられるように思う。とくに物足りなさを感じたのが、私自身も研究対象としている日雇い労働者であり、彼／彼女を取り巻く問題については、単独の論攷が一編も用意されていなかった。

こうした研究動向への個人的な不満と、多くの研究者の間で共有されるべき今後の研究課題に、おそらく多大な貢献をするであろうプロジェクトが大阪市西成区で始動した。「西成情報アーカイブ」事業がそれである。アーカイブと称しているが、ミュージアム機能やライブラリー機能も併設している、日雇い労働者の戦後史のみならず、大都市大阪の地域史の深化に不可欠の要素を兼ね備えている。

そこで、この事業の特徴と具体的な内容を紹介しておきたい。

◇

この事業の最大の特徴は、なんといっても西成区、とくに日雇い労働者街である釜ヶ崎にかかわる豊富な実物資料を収蔵しているということである。なかでも松繁逸夫氏の旧蔵資料は質量ともに群を抜いている。すでに目録化されデジタル化されている資料だけでも三千点あまり、そのほかのものをいれて、ざっと数千点はくだらない。松繁氏が長年、運動に直接かかわる中で見聞し、あるいは多忙な労働の間をぬって集めつづけてきた、まさに戦後の釜ヶ崎、い

な大阪における戦後労働運動の貴重な側面を知ることができる一級資料にはかならない。

その一つが『大阪城』と題した日刊紙(大衆ビラ)。全日本港湾労働組合関西地方本部建設支部西成分会(全港湾西成分会)が一九六九年五月二五日に第一号を発行して以来、日曜、祝日をのぞいて毎日配布しつづけたもので、二〇〇一年六月一九日には一萬号を突破している。一九六九年といえ、高度経済成長の真つただなか、翌七〇年には大阪で万国博覧会が開

催されるということもあり、釜ヶ崎には全国各地から多くの労働者が集結し、昼夜の仕事にいそんでいた時期である。『大阪城』はそんななか、労働者に必要な情報を届けるため、釜ヶ崎の全体的な状況、労働福祉センターの問題、集会や職業訓練などのお知らせ、政治・社会評論、組合の主張など、わかりやすい文章と表現の記事を満載している。そのほとんど全部がファイルにとじられた形で残されている。まさに一九六〇〜七〇年代以降の日雇い労働者をめぐる日常的な問題を知るうえで格好の資料である。このほか、釜ヶ崎日雇労働組合(全国日雇労働組合協議会釜ヶ崎支部)が発行した、やはり日刊の『釜ヶ崎解放』も一部に欠号はあるものの、ほとんど揃って収蔵されている。また、メーデーや毎年おこなわれている越冬闘争や夏祭りに関する資料も見逃せない。

特集としては「うた」「ふろ」「しごと」「めし」「酒」など労働者の日常を取り巻くテーマを多く扱った。あわせて労働者から寄稿された俳句や短歌を掲載するなど労働者自身の表現の場でもあり続けた。この文芸誌のタイトルとして使われている「労務者」という表現は、日雇い労働者を労働者一般から排除するような差別的な表現として六〇年代ごろから世間で使われ始めた用語である。しかし、その刻印を逆手にとってむしろ積極的に使用することで自らの誇りと主張を強く押し出していることは、作り手のひとりである寺島珠雄の言葉からも容易に察しがつく。また、『釜ヶ崎夜間学校ニュース』は一九八〇年五月に発足した釜ヶ崎夜間学校が週一回配布したニュースであるが、「学校」と称していても、そこは教えられ教えるという関係ではなく、みんなが対等の立場で参加することが可能となる場の創造を目指していたことを文面の端々から読み取ることができる。

デジタルデータ化が予定されている。こうした豊富な資料の展示公開を主眼として、第一回企画展「絵図・地図でめぐる西成」を開催し、江戸時代から一九二〇年代までのおよそ一〇〇年間を、おもな絵図(古地図)や地図(実測図、市販図など)でたどっている(展示内容の一部は近くホームページで公開する予定をしている)。「天保国絵図」(国立公文書館所蔵)や「大阪市パノラマ図」(複製)など、実に多様な絵図、地図の数々にとどころ文字などの加工を施し、西成区がどのような変遷をたどってきたかを大きなスケールで読み取れる展示である。

そして、西成情報アーカイブのもう一つの特徴は、西成や釜ヶ崎に関する図書を可能な限り収集し、閲覧できるようにしていることである。二〇〇冊弱の本はもちろんだ大阪と名のつくものを含んでいるが、「西成」「釜ヶ崎」関連だけでも、「これだけあるんやなあ」と、準備段階からすでに多くの人を感じさせ、興味を引いている。全港湾大阪港支部の執行委員をながく務めた故・平井正治氏の大著『無縁声々』(藤原書店、一九九七)はもちろんだ、戦後教育棄民となっていた釜ヶ崎の子どもたちを

救済したあいりん学園のルポである小柳伸頭『教育以前』（田畑書店、一九七八）、漫画カマヤンシリーズ（ありむら潜さん原作）、近年の釜ヶ崎研究の到達点を示す原口剛ほか編『釜ヶ崎のススメ』（洛北出版、二〇一二）など、多彩な書籍を気軽に手に取っていただける環境を整備している。もちろん、釜ヶ崎だけではなく、西成区に関する歴史の書籍や大阪にまつわる文芸書、歴史書などの「顔触れ」は、専門図書館に匹敵する役割を十分に担えるであろう。



本年一〇月八日から、大阪市西成区にある大阪市社会福祉研修・情報センター（西成区出城二丁目）1階フロアーの一角で本格的に公開されている「西成情報アーカイブ」事業は、西成区から大阪市立大学地域連携センターが受託し、西成区の歴史的資料などの活用を目的に取り組んでいる。私は、七月からこの事業の非常勤研究補佐として着任し、大阪市立大学都市研究プラザの水内俊雄教授のもとで、資料整理と企画展示をつくりあげる準備のお手伝いをしている。西成区および大阪市立大学の多く

の歴史を魅力あるものとして伝えることができるよう創意工夫をおこなっている。企画展示が成功しているかどうか、またアーカイブ機能やライブラリー機能が充実しているかどうかは、利用者や来館者の判断に委ねるほかはないのであるが、豊富な資料や多様な機能が存分に生かされたものとなっていると補佐ながら自負している次第である。

昨今、博物館・資料館（ミュージアム）、図書館（ライブラリー）、文書館（アーカイブ）は、それぞれの機能を活用しつつ、かつ相互に連携していく道を模索している。その活動は、それぞれの頭文字をとって「MLA連携」と一般的に言われている。「西成情報アーカイブ」事業もまた、そうした流れの中で活躍することが期待されているが、その道はまだ緒にたばかりであり、今後多くの方の協力と助言を必要としている。

私も大阪市立大学での共同研究「戦後大阪の都市部落の変容過程に関する総合的研究」（代表・野口道彦氏）などで一九五〇年代をとりあげた研究に取り組んでおり、戦後部落史研究と平行して戦後の日雇い労働問題研究にも取り組んでいきたいと考えている。

清水坂の「坂の者」と葬送・寺社

村上紀夫

はじめに

今から約一〇年ほど前、京の町が祇園祭一色に染まる頃に雑踏を避けるようにして、少し離れた清水寺へ向かう坂を歩いていた時のことだ。坂に面した数軒の家の玄関先に甲冑を飾っていた。鎧の腰に巻いた帯が非常に太く、立派だったのが印象に残っている。聞けば、ずっと以前から、このあたりでは祇園祭の頃にはこうして甲冑を飾っていたのだという。

本通信でも以前、河内将芳氏が触れているように、かつて祇園会の際に御輿が出る際に、甲冑に身を包み、棒を持って行列の先導をする役を清水坂の者が勤めていた（註1）。中世の清水坂にいた「坂の者」と呼ばれた人々は、祇園社の支配をうける「犬神人」として、比叡山の検断にかかわっていた。後には京の町を弓の弦を売って歩くようになり、「弦召」などとも呼ばれるようになり、彼らの居住地を弓矢町と呼ぶようになった。その後、「犬神人」の家は次第に

減少し、二〇世紀の初頭にはすべて廃絶したというから、現在の甲冑飾りと直接的な系譜関係はないようだ。

清水坂、犬神人については、戦前には研究者の関心を呼んでおり、喜田貞吉の古典的な研究があったが（註2）、黒田俊雄らによって「非人」を中心に据えた中世の被差別民について論じられるようになる（註3）、清水坂の「非人」宿の組織や生業などについての研究があいつぎ（註4）、さらに絵画史料論（註5）などを巻き込んで活発な議論がなされた。近年は、中世史研究者の間で身分制への関心が後退すると犬神人や清水坂についての論文も次第に少なくなってきた。だが、寺院史・都市史などの視点から新しい研究も見られるようになってきている（註6）。さらに二〇〇〇年以降、犬神人や祇園社に関連する新たな史料が公開され（註7）新しい研究の登場も期待できる環境になってきた。こうした状況にあって、すべての論点を網羅することはできない

が、葬送をめぐる権益を軸に中世・近世移行期の清水坂の「坂の者」(註8)の動向を概観したい。

一、「坂の者」と葬送

馬田綾子氏は主に「東寺百合文書」をもとに、中世後期の清水坂非人が京都の葬送に関わる権利を独占していたことを明らかにした。一五世紀までの東寺は、葬儀を外部の寺院に委託していたが、文安二年(一四四五)に「地藏三昧方」という組織をつくり、自ら葬儀を執り行うようになった。その際に、京都の葬送を独占していた清水坂から免状を受けていた。

一連の史料を分析した馬田氏は、清水坂では国名を名乗る「奉行」らによって構成された「坂惣衆」という組織を持ち、意志決定機関としての「坂之沙汰所」や文書発行などを担う「公文所」という機関がある整然とした集団であったことを明らかにし、中世の清水坂研究を大きく前進させた。この成果をうけ、細川涼一氏は「坂惣衆」について、村落史の成果を踏まえ、「職能の分化にともなう特権集団として」組織されたものであり、「惣衆の自主的な結合や葬送得権をめぐっての所有関係」から清

水坂に集まってきた「癩者」などを排除するかたちで分化していったという見通しを示している(註9)。「公文所」については、三枝暁子氏が山門と祇園社の本末関係が変化していくなかで「山門の命を受けて『犬神人』を動員する」ためにつくられた機関であったとした(註10)。今や、清水坂

「坂の者」の墓所支配について論じるにあたっては、組織や意志決定機構についても目配りすることが必要な段階になったといえよう。坂による墓所支配について、非常に興味深い史料が東山長楽寺に所蔵される「七条道場金光寺文書」に含まれている。その一部は紹介されているのだが(註11)、二〇一二年に『長楽寺蔵七条道場金光寺文書の研究』(以下『金光寺文書の研究』)が刊行されたことで漸くその全貌が明らかになった。ここには、清水寺領「赤築地」という場所にあった「茶毘所」の様子が中世から近世にかけて長期にわたってうかがうことができるのである。既に『金光寺文書の研究』に大山喬平氏・佐藤文字子氏による詳しい解説・論考(註12)が掲載されている。以下、大山氏らの解説によりながら、概略を紹介しよう。

応安五年(一三七二)に善阿という人物から時阿を経て金光寺に売却された東山赤築地にあった「たみ(茶毘)所」(『金光寺文書の研究』八二号、八三号(註13))。京都の葬送を「坂の者」が掌握していた時代にあつては、すべてを金光寺が差配するというわけにはいかなかったようで、正長元年(一四二八)段階では、葬送にあつて「引馬」があつた場合などは、「尅貫文」を「坂公文所」に出すことになつていった(『金光寺文書の研究』一一五号)。また、棺桶を載せる蓮台を使用する場合も大永三年(一五三三)までは「百疋」の支払が必要だった(『金光寺文書の研究』一三二号)。このように、火葬場は七条道場金光寺の所

有となつていったが、葬送に関する一定の権益を「坂の者」は保持し続けていたのである。しかし、「坂の者」の権利は次第に後退していく。大永三年(一五二三)に「従七条道場預御合力候条」というから、経済的な支援を七条道場金光寺からうけた「坂の者」は、それまで「百疋」だった役銭を「参拾疋」に減額しているのである(『金光寺文書の研究』一三三号)。そして、元和七年(一六二二)の

こと、東山赤築地から「七条河原口」に墓所を移動した際、それまでは「にないこし 五升也」「板こし 尅斗也」など、葬送で使用される道具ごとに細かく使用料が決まっており、葬送ごとに規模に応じて金光寺から坂へ米銭が支払われていたところが、墓所の移動を機に一切合切をまとめて「毎年二三石五斗ニ永代相定事」となつた(『金光寺文書の研究』一五〇号・一五一号・一五二号)。

その後、宝永元年(一七〇四)には、この金光寺が経営する七条火屋は、年に三〇〇五〇両の収益をあげていたが、そのなかから「米三石五斗」だけを清水坂の「絃召方」に渡すことになつていったという(『金光寺文書の研究』一六一号)。

佐藤文字子氏は、この事態を「坂の葬送権が、しだいに形骸化弱体化していく過程」とし、大山喬平氏も、金光寺のみならず、浄福寺・知恩院・長香寺など複数の寺院で近世以降の葬送の場における坂非人の影響力が小さくなっている事実を指摘している。

こうした「坂の者」の影響力が縮小していく背景には、当然ながら後ろ盾となつてきた比叡山延暦

寺が信長の焼き討ちをうけたことによる衰退も大きかったであろうし、権力が寺院と家を介して人を把握しようとするなかで整備が進められた寺檀制度の確立は、葬送を「坂の者」が独占するような有り様を許容しなかったであろう。ただ、近世段階において葬送に対する坂の権益が完全に消えてしまったわけでもないところが面白いところだ。

二、赤築地と「坂の者」

ところで、大山氏も注意を向けている（『金光寺文書の研究』四二五頁）が、「赤築地」について、別の売券を見ると「延年寺あかつい地の地」（『金光寺文書の研究』八四号）という表現が見えている。大山氏は触れていないが、親鸞が茶毘に付された場所が「延年寺」と呼ばれた地にある茶毘所である。親鸞火葬の地は忘れられ、現在の「延年寺」は近世に考証が行われ、特定されて整備された場所である。また、清水寺の付近に「延年寺」と呼ばれる寺院も存在していたため、両者は混同されることも多い。「赤築地」は清水寺領ということなので、後者の清水寺近くにあった「延年寺」附近ということにな

るだろう。ただ、面白いのは親鸞葬送の地を比定するために伝承を蒐集した『宗祖茶毘所延仁寺聚説』という史料に、両者を混同したのか、次のように記している。

一、七条茶毘所ハ元鳥辺山ニあるよし、ツルメソ持居し所、宮へ差支之事有し故、ツルメソ売払しを遊行へ買取旨、于今ニ三石五斗宛、愛宕役人江遣ス旨、先方請取所ニ赤坂年寄卜書来よし、元鳥辺山赤坂と云所ニ有しト（註14）

この資料は年代などを記していないが、近世後期のものだろう。この段階で、ツルメソ（「坂の者」）所持の茶毘所を遊行すなわち七条道場金光寺が購入したという一四世紀段階のできごとを伝えているのも興味をひくところだ。「赤坂」というのも「赤築地」と「坂」を混同したものである。特に注意しておきたいのは「三石五斗」を今も「愛宕（宕）役人」に渡している点である。「三石五斗」といえば、元和七年（一六二一）の金光寺と坂の間で取り決められた年間の支払高と一致している。つまり、本資料は「赤築地」に関する近世後期の状況を記しているものと考えられるのだ。

佐藤文子氏は、『金光寺文書の研究』所載の解説で、天保四年（一八三三）に服部平左衛門という人物が「数年来請取来候」という金光寺からの「三石五斗」を「香具屋嘉兵衛」に売却している（『金光寺文書の研究』一九七号）ことをもって、服部平左衛門が赤築地にかかる三石五斗の年米を受けとる権利を入質し、香具屋嘉兵衛に流れたと推測している。このことから、「坂非人」による葬送支配の記憶は徐々に遠ざかり、年米はより広く京都の都市民のなかで流転していくようになっていった」としている（『金光寺文書の研究』四八六頁）。

確かに服部平左衛門が「三石五斗」の年米を受けとる権利を手放したことは間違いない。ここで、気にかかるのは「服部平左衛門」という売却した人物の名前。慶長六年（一六〇一）の愛宕念仏寺の請文で三味輿の使用料について署名している「坂弓矢町念仏寺役人」のひとり「服部新平」とある（『金光寺文書の研究』一四六号）。貞享二年（一六八五）刊の『京羽二重』には、市中の著名な諸職人を列記したなかに「弦指并杵」の項があり、そこに「六はら坂」に

「服部明石」と「同（服部）豊後」の名も見えている。このように、「服部」という名字をもつ人物は坂弓矢町にいたのだ。あまりにも時代の離れた僅かな史料から断定することは到底できないが、仮に天保四年（一八三三）に年米三石五斗を取る権利を手放した「服部平左衛門」が弓矢町の服部氏であったとしたら、坂の葬送に関する得分は一九世紀までは辛うじて保持されていたことになる。佐藤氏の「坂非人」による葬送支配の記憶は徐々に遠ざかり、年米はより広く京都の都市民のなかで流転していった」という指摘は事実としても、それがいつからそのようになったのかについては、慎重に検討する必要があるのかもしれない。

このように佐藤氏の主張に疑義を呈するにはあまりにも頼りない根拠しかないのだが、天保段階まで清水坂に墓所に関する権益が保持されているのではないかと考えるにはひとつの理由がある。別稿（註15）で詳しく紹介したが、清水坂に隣接する西御門町の一角が「坂領」といわれ、清水寺領であるにもかかわらず清水坂の者が「年貢」を取る権利をもっていたのである（註16）。この「坂領」について、天保

一四年（一八四三）に本来の領主である清水寺は、難色を示しつつも「法成寺」跡地で旧「はか地」の「不浄地」であるから、「坂之者へ遣」わして「今ハ坂へ年貢遣」していると認めているのである。

領主でもない者が「年貢」を受けるとするのは奇妙といわざるをえない。こうしたあり方が許容されていたのは正規の権利というよりは慣習にすぎず、だからこそ天保一四年（一八四三）に根拠が問題になったわけなのだろう。とはいえ、この慣習が否定されることなく受け入れられたとすれば、一九世紀段階でもそれなりに尊重すべきものだったということになる。このような権益が天保期まで確実に存続していたことを想起すれば、茶毘所をめぐる権利も「坂」の経済的な特権として、かろうじて保持されていた可能性もあるのではないだろうか。

三、愛宕念仏寺と「坂の者」

清水坂の者が「墓」に対して持っていた中世以来の権益が、僅かながらも近世に継承されていたことが明らかになった。それでは、なぜこうした中世以来の権利がことによると一九世紀まで「坂の者」

の間で保持されていたのだろうか。ここで、思い出していたいただきたいのが、先に紹介した江戸後期と思われる『宗祖茶毘所延仁寺聚説』の記事だ。ここでは、赤築地にかつて存在していたという火葬場にかかる年米は「ツルメソ」（「坂の者」）に支払われているとしながらも、一方で「愛宕（宕）役人」がうけとっている」と記されていることだ。もうひとつの西御門町の「年貢」も、当時は「弓矢町江為相任有之候」という問題の土地の「地子年貢」は「弓矢町愛宕念仏寺」へ「持主より夫々直納」していたという。つまり、いずれも「坂の者」の権利なのか、愛宕念仏寺のものが混同しかねない実態があったことになる。どうやら愛宕念仏寺の存在が鍵になりそうだ。

ここで、次に愛宕念仏寺について見ていこう。愛宕念仏寺とは、現在は嵯峨野にあるが、大正一一年（一九二二）に現在の場所に移転するまでは清水坂の弓矢町のほぼ中心にあった。この愛宕念仏寺と清水坂はどのような関係にあったのだろうか。近世の地誌『雍州府志』には、毎年正月二日夜に愛宕念仏寺において犬神人が方丈で「酒宴」をし、それから本堂の牛王加持の場で太鼓や法螺貝を鳴らすとある。その喧嘩から、この様子を「天狗の酒盛り」と呼んでいたようだ。この正月の牛王加持の場で行われる「天狗の酒盛り」とは、修正会である。つまり、この愛宕念仏寺は弓矢町と深い関係があり、そこで行われる行事の重要な部分を犬神人が担っていたことになる。

清水寺文書」に「弓矢町年貢共愛宕役人相兼候様」とあるように、弓矢町の年寄が愛宕念仏寺の「役人」と認識されていたのは、町の代表者であった年寄が寺院の運営とも深い関係にあったことが背景にあるだろう。この弓矢町の年寄は、たんなる愛宕念仏寺の運営に関わる代表者ではなく、弓矢町全体の代表者であり、祇園会の「弓屋町ノ法師武者」について「年寄衆ヲ六人定」とあるように弓矢町の年寄が祇園会の神幸の先導などとも行っていたのである。こうして見たとき、近世の弓矢町を取り巻く特権は、愛宕念仏寺にもかかわる権利と見なされるようになっていたと思われる。少なくとも言説の世界に関していえば、明和六年（一七六九）に弓矢町の者が国名を名乗ってきた理由について調査がおこなわれた際、「先祖右町内愛宕寺開基千観内供与申僧之家来」であったとされているのである（註17）。中世期の史料や近世初頭の史料には、比叡山や祇園社との関係が強調されていた犬神人だったが、比叡山の影響力が後退するなかで、清水坂の近世になり新たに町内にある愛宕念仏寺との関係を強調するようになっていったと考えられる。そして、次第に弓屋町の「坂の者」は、自分たちが保持している権利を町内にある古刹との関わりを軸に理解するようになっていったのではないだろうか。

それを視覚化した儀礼が、実際に愛宕念仏寺と弓矢町がいつたいたようになっておこなっていた「天狗の酒盛り」だったとすれば、比叡山の求心力がなくなった近世の弓矢町において、共同体の再編に愛宕念仏寺が果たした役割は決して小さなものではなかっただろう。

ただ、犬神人と愛宕念仏寺との関係がいつから始まったのか、中世まで遡りうる関係か、それとも近世的な「由緒」（註18）なのかという問題については、現段階では史料で確認することができていな

いので、今後の課題としておきたい。

おわりに

ここでは、新たに公刊された『金光寺文書の研究』から垣間見える中世から近世にかけての清水坂と墓地との関係について紹介をした。ここでは触れることができなかったが、葬送の実務に携わっていた「隠亡」についても、非常に興味深い史料が含まれている(註19)。この貴重な史料が刊行され、多くの研究者が利用できるようになったことで、おそらく清水坂や京都の葬送に関する新たな研究が次々と世に問われることになるだろう。本稿も『金光寺文書の研究』に刺激されて、ささやかな問題提起を行ってみた。『金光寺文書の研究』の豊かな可能性と魅力に比べれば、実に貧しい成果しかあげることができなかったが、それでもこれまでなされてきた中世の犬神人を中心とした研究からは見えてこなかった新しい論点を少しは提示できたのではないかと考える。とりわけ、犬神人と愛宕念仏寺との関係については、史料のさらなる発掘と研究の深化を自身にとっても課題としたい。

註

- (1) 河内将芳「サントリー美術館蔵『日吉山王祇園祭礼図屏風』にみえる犬神人について」(『京都部落問題研究資料センター通信』第一〇号、二〇〇八年一月)
- (2) 喜田貞吉「つるめそ(犬神人)考」(『喜田貞吉著作集』第一〇巻、平凡社、一九八二年、初出は一九三三年)
- (3) 黒田俊雄「中世の身分制と卑賤観念」(『黒田俊雄著作集』第六巻、法藏館、一九九五年)ほか
- (4) 大山喬平『日本中世農村史の研究』(岩波書店、一九七八年)、丹生谷哲一「身分・差別と中世社会」(塙書房、二〇〇五年)、馬田綾子「中世京都における寺院と民衆」(『日本史研究』二三五号、一九八二年)、細川涼一「中世の身分制と非人」(日本エディタースクール出版部、一九九四年)
- (5) 下坂守『描かれた日本の中世』(法藏館、二〇〇三年)
- (6) 三枝暁子『比叡山と室町幕府』(東京大学出版会、二〇一一年)・拙稿「近世『弦召』考」(『大阪人権博物館紀要』第三号、一九九九年)
- (7) 『叢書 京都の史料4 八瀬童子会文書』(京都市歴史資料館、二〇〇〇年)、『「八瀬童子会文書」補遺・総目録』(京都市歴史資料館、二〇〇二年)、八坂神社文書編纂委員会編『新修 八坂神社文書 中世篇』(臨川書店、二〇〇二年)、村井康彦・大山喬平編『長楽寺蔵七条道場金光寺文書の研究』(法藏館、二〇一二年)
- (8) 中世・近世の史料には、清水坂を舞台に活動した存在について、「犬神人」・「坂非人」・「弦召」など多様な呼称が登場する。それぞれ、時代や語の使用の立場によって指し示す対象に振幅があるように思われる。中世・近世の比較的長期にわたる時代を対象とする本稿では、史料上の文言を除き、清水坂・坂弓屋町に居住し、葬送得分権や神事への奉仕権などをもっていた存在を指し示す呼称として、「坂の者」を使用する。清水坂において、一定の権利を保持した集団についての厳密な検討は今後の課題としたい。
- (9) 細川前掲書
- (10) 三枝前掲書
- (11) 後述する元和七年の史料は、「清水坂奉行衆連署置文」としては『日本歴史』第六一三号(一九九九年六月)に石川登志雄氏の解説とともに口絵写真として掲載され、そこには「平成十二年の旧金光寺開創七百年を記念して、金光寺文書の史料集を刊行する予定とのこと」と記されていた。また、一部は『長楽寺千年・遊行歴代上人肖像彫刻並びに七条文書』(長楽寺、一九八二年)、『特別陳列旧七条道場金光寺開創七〇〇年記念 長楽寺の名宝』(京都国立博物館、二〇〇〇年)で紹介されていたが、近世文書を含む全体像の翻刻は長く待たれるところであった。
- (12) 大山喬平「清水坂非人の衰亡」、佐藤文子「近世京都における金光寺火屋の操業とその従事者」(いずれも『金光寺文書の研究』)
- (13) 『長楽寺七条道場金光寺文書の研究』「史料編」所収の「金光寺文書」以下、同書からの引用は『金光寺文書の研究』とのみ表記し、同書に付された資料番号を記す。
- (14) 「龍谷大学所蔵文書」(京都部落問題研究資料センター架蔵写真帳による)
- (15) 前掲拙稿
- (16) 「清水寺文書」。以下、西御門町についてはすべて「清水寺文書」による。
- (17) 『陽明文庫』「諸職人町人共国名官名相名乗候者共且御触後国名官名等相止候者共名前帳」(『京都の部落史』第四巻、五六〜七頁)
- (18) 久留島浩「村が『由緒』を語るとき」(久留島浩・吉田伸之編『近世の社会集団』山川出版社、一九九五年)
- (19) 前掲、佐藤文子論文

福井徹／道徳教育と人権教育 柴原弘志／生きる力の育成 キャリア教育、道徳教育、人権教育の関係性 川崎雅也
特集 2 部落における青年の雇用と生活 下

引き継がれる困難 部落の若者の生育家族/学歴/職業達成 妻木進吾／部落の青年にとっての部落解放運動 運動への参加・継続要因 内田龍史／若者の被差別経験 対抗メッセージ構築の課題 西田芳正／部落青年の結婚問題 全国部落青年の雇用・生活実態調査から 齋藤直子
資料

IEA「市民性教育国際調査（ICCS2009）生徒意識調査と認知テスト 解説」 若槻健／IEA「市民性教育国際調査（ICCS2009）生徒意識調査と認知テスト 抄訳」 若槻健・棚田洋平

部落解放ひろしま 93号（部落解放同盟広島県連合会刊，2013.7）：1,000円

特集 広島県水平社創立90周年を迎えて
中野繁一著『広島県水平運動史』を読む 青木秀男／水平社の思想と行動を発展させるために 小森龍邦／水平社から浄土真宗が問われてきたもの—一本願寺教団の二つのタブーを問う— 小武正教／同和教育・解放教育運動の視点で考える水平社創立90年 石岡修

部落史研究報告集 17（八幡浜部落史研究会刊，2013.6）
「かわた」と芸能の関わり—和歌山藩城下の場合— 水本正人

愛媛における改善・融和運動に警察官の果たした役割—新聞記事から読み解く— 五藤孝人

資料紹介①「愛媛水平社を立ち上げた先人たち」，②「荊の道を乗り越えて 福岡實一（1921～1988）」 福岡朋子

史料紹介 1 山下友枝が植村省馬へ宛てた葉書，2 「南伊予村に水平社支部設置」（愛媛新報の大正12年5月5日付の記事） 水本正人

現代語訳 『伊予小松藩会所日記』遍路関係記事（一部分）—喜代吉榮徳著『四国辺路研究』第20号（海王舎）より— 水本正人

『部落史研究報告集』（1～17集）一覧

部落問題研究 206（部落問題研究所刊，2013.8）：2,187円

近世後期徳島藩における牛馬皮の流通と取締 町田哲
近世大坂の非人と人別帳 塚田孝
書評 広川禎秀・山田敬男編『戦後社会運動史論 2—高度成長期を中心に—』 佐々木隆爾

リベラシオン 150（福岡県人権研究所刊，2013.6）：1,000円

石堂川周辺史—旧柳町遊郭街と寛政五人衆の史跡を巡る— 民衆史こぼれ話 片隅に生きた人たち 15 腑分けが行われた理由—福岡藩の蘭学と解剖 8— 石瀧豊美
遠隔地皮革流通の構造—九州諸藩と大坂渡辺村 のびしょ

うじ

教育課題としてのセルフエスティームとその周辺概念についての考察—福岡県の人権「同和」教育におけるセルフエスティーム論を中心にして— 峰司郎

史料紹介 新聞に見る部落問題関係史料 11—『全九州水平社史料集（仮）』草稿より— 旧『全九州水平社史料集』プロジェクト

資料紹介 生活の柄 68—「近世民衆史の泉」改め— 竹森健二郎

リベラシオン 151（福岡県人権研究所刊，2013.9）：1,000円

特集 福岡県における「同和」教育の歴史
福岡県における「同和」教育実践・運動の組織化過程—林力は福岡県の「同和」教育実践・運動をどのように組織してきたのか— 林力，板山勝樹／福岡県における「同和」教育思想の特徴とその形成 板山勝樹
『13年 春』～物語・識字学級開設にかかわる考察と整理— 西田静

中世河原者の庭づくりについて—銀閣寺（慈照寺）庭園を中心に—（上） 上杉聰

民衆史こぼれ話 片隅に生きた人たち 16 勝小吉『夢酔独言』を読む—福岡藩の蘭学と解剖 9— 石瀧豊美
新聞に見る部落問題関係史料 12 —『全九州水平社史料集（仮）』草稿より— 旧『全九州水平社史料集』プロジェクト

資料紹介 生活の柄 69—「近世民衆史の泉」改め—「友枝手永大庄屋日記」から慶応4（1868）年・明治4（1871）年 竹森健二郎

和歌山人権研究所紀要 第4号（和歌山人権研究所刊，2013.7）：2,000円

壬申戸籍の成立と「臣民」なる秩序—戸籍が形成する「公」とは— 遠藤正敬

史料紹介

光明寺文書・頼母子関係史料 矢野治世美／新宮・東牟婁地域の戦前の特高資料について 山崎泰
第18回全国部落史研究大会報告集

前近代分科会「和歌山における賤民構造」
紀州藩牢番頭仲間と城付かわたの村の構造—集団・経済基盤を中心に— 藤本清二郎／紀州藩の追放刑と牢番頭 安竹貴彦

近現代分科会「水平社と衡平社の連携」
衡平社と水平社の比較—創立期の類似性と差異— 金仲燮／衡平社と水平社の交流について 徐知伶

全体会報告 中世高野山金剛峯寺及び同寺領荘園における平等と差別 山陰加春夫

和歌山研究所通信 45（和歌山人権研究所刊，2013.7）
近世社会における真宗道場と住民—『史料編』前近代2の紹介を兼ねて— 岡村喜史

ク編集委員会刊, 2013. 5) : 1,000円

天皇制と民主主義—敗戦直後の知識人における天皇制擁護の実相— 河西秀哉

インタビュー 戦後沖縄における一教員の軌跡—新垣仁英氏に聞く— 櫻澤誠

書評 戦前日本における「スポーツ」とは?—高嶋航著『帝国日本のスポーツ』 萩原稔/ライフヒストリーマジックの洗礼—山本栄子著『歩—識字を求め、部落差別と闘いつづける』を読んで 梁説

史料紹介 『堺聯隊区管内兵事研究会報』 久保庭萌

新刊紹介 藤村一郎著『吉野作造の国際政治論—もうひとつの大陸政策』 岡本真奈

はらっぱ 342 (子ども情報研究センター刊, 2013. 8)

特集 日本軍「慰安婦」について考える

ヒューマンJournal 206 (自由同和会中央本部刊, 2013. 9) : 500円

部落解放運動40年を振り返って 9 運動による利権・腐敗への疑念 灘本昌久

ヒューマンライツ 304 (部落解放・人権研究所刊, 2013. 7) : 525円

特集 生活困窮者支援のいま

障害者差別解消推進法(障害者差別禁止法)の特徴と残された諸問題 楠敏雄

私が最近読んだ本

朝治武『差別と反逆 平野小剣の生涯』/広瀬浩二郎・嶺重慎著『さわっておどろく! 点字・点図がひらく世界』/越田清和『アイヌモシリと平和 <北海道>を平和学する!』

ヒューマンライツ 305 (部落解放・人権研究所刊, 2013. 8) : 525円

明日をかえる法人—新たな人権への取り組み 1 まちとともに歩む「水平会」 山中辰也

ヒューマンライツ 306 (部落解放・人権研究所刊, 2013. 9) : 525円

特集 地域で支える子育て

走りながら考える 145 橋下徹氏の女性「蔑視」発言を考える 2—「大誤報」でも「読解力不足」でもない— 北口末広

ひょうご部落解放 149 (ひょうご部落解放・人権研究所刊, 2013. 6) : 700円

特集 つながる、つなげる、ともにあゆむ—解放同盟兵庫県連青年部の活動

連載 牛から命を学ぶ 最終回 どんどんつながり、ますますひろがる 高吉美

本の紹介

構村人権の歴史編纂委員会編『構村 人権の歴史—人権確立へのあゆみ—』/本橋成一著『うちは精肉店』

所長就任あいさつ 石元清英

部落解放 680 (解放出版社刊, 2013. 7) : 1,050円
第39回部落解放文学賞

部落解放 681 (解放出版社刊, 2013. 8) : 630円

特集 ESD (持続可能な開発のための教育) の10年の最終年にむけて

本の紹介

朝治武著『差別と反逆 平野小剣の生涯』 関口寛/山本栄子著『歩 識字を求め、部落差別と闘いつづける』 大濱冬樹/平田オリザ著『わかりあえないことから コミュニケーション能力とは何か』/中塚久美子著『貧困のなかでおとなになる』

差別なき世界の構築をめざした部落解放運動の役割 差別国際運動創立25周年をふまえて 友永健三

闘志溢れる解放運動の烈士 羽音豊さんを偲ぶ 組坂繁之

書評 吉村智博著『近代大阪の部落と寄せ場—都市の周縁社会史』 現場から学ぶことの大切さ 能川泰治

水平社論争の群像 9 無産政党 朝治武

部落解放 682 (解放出版社刊, 2013. 9) : 630円

特集 戸籍等個人情報大量不正取得事件と本人通知制度

本の紹介 部落解放運動再生への指南書 森田益子著『自力自闘の解放運動の軌跡 被差別部落に生まれ、育ち、闘う』 谷元昭信

大阪とハンセン病ゆかりの地 1 三宅美千子

部落文化・再生文化 1 循環型社会の基軸/地域社会の再生 川元祥一

水平社論争の群像 10 融和運動 朝治武

部落解放 683 (解放出版社刊, 2013. 10) : 630円

特集 差別禁止法は必要か

差別の実態に見合った法制度を 人種差別禁止法の必要性を中心に 丹羽雅雄/差別を乗り越える手段としての差別禁止法 部落差別の現状から見えてくる課題 谷川雅彦/日本社会とヘイトクライム ヘイト・スピーチを素材にして 金尚均/障害を理由にした分離や排除のない社会を 障害者差別解消法の意義と課題 尾上浩二/差別扇動に市民が立ち向かうためには 国連人種差別撤廃委員会からの勧告 小森恵

本の紹介 知里真志保著『知里真志保の「アイヌ文学」』

小坂博宣

大阪とハンセン病ゆかりの地 2 三宅美千子

部落文化・再生文化 循環型社会の基軸/地域社会の再生 2 川元祥一

水平社論争の群像 11 軍隊差別 朝治武

部落解放研究 198 (部落解放・人権研究所刊, 2013. 7) :

1,400円

特集 1 人権教育と道德教育を考える

人権の視点に立った道德教育の推進 国際的な市民性教育の文脈のなかで 平沢安政/人権教育と道德教育の関連 島恒生/NHK『道德ドキュメント』の制作に関わって

して— 松下佳弘

侯啓剛の統一戦線論と「反傾向闘争」—中国東北における統一戦線論に関する基礎的考察— 田中隆一

女性差別撤廃委員会総括所見フォローアップの検証 山下泰子

インドの農村の貧困女性たちの経済的自立について—成功と失敗を分ける分岐点は何か— 山下明子

九州の大学における同和教育—同和教育開講に至る経緯からみた今後の課題— 熊本理抄

オーストラリア先住民の個人史にみる「多文化な状況」への対応—南東部先住民ヨルタ・ヨルタの個人史を事例として— 友永雄吾

「障害者差別禁止法」以降の人権教育に向けて 松波めぐみ

外国人配偶者に対する包括支援に関する一考察—外国人DV被害者の中長期支援の実現に向けて— 福嶋由里子

地域と人権 1126 (全国地域人権運動総連合刊, 2013. 7) : 150円

国民的融合論との対話—部落問題解決への理論的軌跡と展開— 28 学者の貢献 5 丹波正史

地域と人権 1127 (全国地域人権運動総連合刊, 2013. 8) : 150円

国民的融合論との対話—部落問題解決への理論的軌跡と展開— 29 学者の貢献 6 丹波正史

地域と人権 1128 (全国地域人権運動総連合刊, 2013. 9. 15) : 150円

国民的融合論との対話—部落問題解決への理論的軌跡と展開— 30 学者の貢献 7 丹波正史

月刊地域と人権 351 (全国地域人権運動総連合刊, 2013. 7) : 350円

アイヌ民族の現状—最近の生活実態調査から— 尾川昌法

月刊地域と人権 352 (全国地域人権運動総連合刊, 2013. 8) : 350円

特集 第8回地域人権問題全国研究集会 フィールドワーク 崇仁(七条) ウォッチング 野々口正吾, 山本茂一報告

月刊地域と人権 353 (全国地域人権運動総連合刊, 2013. 9) : 350円

特集 同和問題・行政の今日的状況

月刊地域と人権 354 (全国地域人権運動総連合刊, 2013. 10) : 350円

埼玉県 相次ぐ同和行政終了をめぐる裁判 三枝茂夫
福岡県筑紫野市の実態 乱脈な同和行政を是正したい 武藤哲志

鳥取県の実態 同和問題の現状調査について 田中克美

地域と人権京都 648号 (京都地域人権運動連合会刊, 2013. 7. 1) : 150円

同和奨学金返還問題の検討 13 川部昇

地域と人権京都 649号 (京都地域人権運動総連合刊, 2013. 7. 15) : 150円

同和奨学金返還問題の検討 14 川部昇

地域と人権京都 650号 (京都地域人権運動連合会刊, 2013. 8) : 150円

同和奨学金返還問題の検討 15 川部昇

地域と人権京都 651号 (京都地域人権運動連合会刊, 2013. 8. 15) : 150円

同和奨学金返還問題の検討 16 川部昇

地域と人権京都 652号 (京都地域人権運動連合会刊, 2013. 9. 1) : 150円

同和奨学金返還問題の検討 17 川部昇

地域と人権京都 653号 (京都地域人権運動連合会刊, 2013. 9. 15) : 150円

同和奨学金返還問題の検討 18 川部昇

地域と人権京都 654号 (京都地域人権運動連合会刊, 2013. 10. 1) : 150円

同和奨学金返還問題の検討 19 川部昇

であい 616 (全国人権教育研究協議会刊, 2013. 7) : 150円

人権のまちをゆく 66 心がふれあう啓発を 舩松人権歴史館

人権文化を拓く 189 「世界の当事者」であるために人権教育ができること 松永真純

であい 617 (全国人権教育研究協議会刊, 2013. 8) : 150円

地域教材「松浦武四郎」の学習を通して—アイヌの人たちとの出会いから差別について学ぶ— 久保若奈

人権文化を拓く 190 私から始まるエンパワメント 梁陽日

であい 618 (全国人権教育研究協議会刊, 2013. 9) : 150円

人権のまちをゆく 67 中上健次の足跡をたどる

人権文化を拓く 191 知恵と力をあわせられる職場づくり 嶋田至

同和教育論究 33 (同和教育振興会刊, 2013. 8) : 1,500円

能にみる中世の女人往生思想 岩本智依

一如会は何ゆえに挫折したか—梅原真隆の思想にそって— 神戸修

史料紹介 近世真宗差別問題史料 8—「(仮称) 富田御坊類寺講会一件」ほか— 左右田昌幸

書評1 『改訂 同朋教団のよろこび』 岩本孝樹

書評2 部落問題について正面から議論をするということ—奥田均『見なされる差別—なぜ、部落を避けるのか』の書評にかえて— 奥本武裕

「同和地区」における真宗事情調査 信越地方中間報告

ノートル・クリティーク 06 (ノートル・クリティーク

野間宏と寺尾判決 19 庭山英雄

しこく部落史 15 (四国部落史研究協議会刊, 2013. 5) : 500円

シンポジウム 「差別撤廃に取り組んだ警察官」

改善・融和運動に警察官の果たした役割 増田智一／高知県における警察官の取り組み 山下典昭／愛媛における改善・融和運動に警察官の果たした役割—新聞記事から読み解く— 五藤孝人／差別撤廃に取り組んだ香川の警察官 山下隆章／四国部落史夏期研究会に参加して 吉田文茂

史料紹介 『塩飽小坂小誌』について 浜近仁史

高知県における部落改善・融和運動に警察官が果たした役割 山下典昭

「阿波木偶箱廻し」調査・伝承推進事業報告 (2011年度～2012年度) より

内藤素行が語る「幕末から明治」の世相 水本正人

書評 五藤孝人著『世直し歌の力—武佐衛門一揆とちよんがり—』 水本正人

人権と部落問題 846 (部落問題研究所刊, 2013. 8) : 630円

特集 平和に生きる権利

文芸の散歩道 小川霞堤—大正期「悲劇小説」作家の経歴 秦重雄

人権と部落問題 847 (部落問題研究所刊, 2013. 9) : 630円

特集 メディアの役割を問う

文芸の散歩道 添田知道著『小説教育者』—子どもの立場で奮闘した明治期の一教師像 桑原律

人権と部落問題 848 (部落問題研究所刊, 2013. 9) : 1, 155円

特集 今日の貧困を考える

2012年度部落問題研究所定期誌総目次

『人権と部落問題』『部落問題研究』

人権と部落問題 849 (部落問題研究所刊, 2013. 10) : 630円

特集 未来を切り拓く若者たち

文芸の散歩道 近世文芸に著されたハンセン病—曲亭馬琴の場合— 小原亨

じんけんぶんかまちづくり 40 (とよなか人権文化まちづくり協会刊, 2013. 9)

寺本知さんの思い出 中川幾郎

報告 寺本知生誕100年 豊中水平社創立90周年記念連続講座

第1講 黒川みどりさん, 第2講 藤田敬一さん, 第3講 溝口正美さん

「柔能く剛を制す」～寺本知さんから学んだこと～ 友永健三

季刊人権問題 372 (兵庫人権問題研究所刊, 2013. 7) :

700円

八鹿高校事件の真実を改めて世に問う 10 生徒達が見た“八鹿高校事件”(中)

季刊人権問題の総目次 第29号～第32号

振興会通信 111号 (同和教育振興会刊, 2013. 7)

過去帳に類する帳簿の開示はなぜ起こったのか 2 小笠原正仁

同朋運動史の窓 18 左右田昌幸

真宗 1314号 (真宗大谷派宗務所刊, 2013. 9) : 250円

人の世に熱あれ人間に光あれ 12 真宗大谷派同和関係寺院協議会

真宗 1315号 (真宗大谷派宗務所刊, 2013. 10) : 250円

人の世に熱あれ人間に光あれ 13 真宗大谷派同和関係寺院協議会

身同 33号 (真宗大谷派解放運動推進本部編, 2013. 6) : 1, 000円

橋下市長は部落民か—『週刊朝日』による橋下市長差別事件をめぐるいくつかの構造— 上杉聰

戸籍制度と人権問題 二宮周平

2012年度人権週間ギャラリー展シンポジウム 同朋会運動のこれらに向けて—解放運動の視点から—

身元調査お断り・過去帳閲覧禁止運動の現在 雨森慶為 軍人(戦没者)院号について—その歴史と機能について— 山内小夜子

世界人権問題研究センター研究紀要 18号 (世界人権問題研究センター刊, 2013. 3) : 2, 500円

権利の普遍性を文化の特異性に架橋するための実践的枠組の検討—国際的な協力を通じた権利アプローチの発展に向けて— 三輪敦子

地方団体にみる戦前・戦中期の融和運動論—近畿融和連盟の思想と行動から— 関口寛

近世近代移行期における山城国綴喜郡松原村の変容とその背景 井岡康時

戦後失業対策事業と失対労働者運動の出發—戦後初期京都市失業対策事業と失対労働者運動の再検討— 杉本弘幸

法学者・穂積重遠における個人と社会、法と道徳 手島一雄

シベリア抑留と部落問題—日本語新聞における部落問題関係記事を中心に— 本郷浩二

GHQ/SCAP占領期における日本政府の在日朝鮮人対策—1948年半ば～1949年初頭の時期にかけての「国籍」措置を中心に— 宮本正明

市民運動データベース化の意義と課題—東大阪市・「合田文書」の韓国への移管を事例に— 福本拓

平安初期における蝦夷の「帰化」—「俘囚」身分の固定をめぐる— 菅澤庸子

占領期朝鮮人学校閉鎖措置の再検討—法的枠組みに着目

9.10) : 70円

「日本人」力士とは 相撲取りはナニジンでもかまわない 渡辺毅

解放新聞東京版 815号 (解放新聞社東京支局刊, 2013.7.1) : 90円

荒川で皮革を生産し続けて 1 大橋利治

解放新聞東京版 816号 (解放新聞社東京支局刊, 2013.7.15) : 90円

荒川で皮革を生産し続けて 2 大橋利治

解放新聞東京版 817号 (解放新聞社東京支局刊, 2013.8.1) : 90円

荒川で皮革を生産し続けて 3 大橋利治

解放新聞東京版 818号 (解放新聞社東京支局刊, 2013.8.15) : 90円

本紹介 藤沢靖介『部落・差別の歴史—職能・分業、社会的地位、歴史的な性格』を読む 松浦利貞

解放新聞東京版 821号 (解放新聞社東京支局刊, 2013.10.1) : 90円

良質な革の生産に生きる 1 業界保護や皮革文化の振興にとりくむ 齊京昭

解放新聞奈良県版 982号 (解放新聞社奈良支局刊, 2013.7.10) : 50円

まちづくり運動のための史料紹介 4 洞村移転の歴史検証 辻本正教

解放新聞奈良県版 984号 (解放新聞社奈良支局刊, 2013.8.10) : 50円

まちづくり運動のための史料紹介 5 大和国葛下郡東山村関係史料 辻本正教

解放新聞奈良県版 986号 (解放新聞社奈良支局刊, 2013.9.10) : 50円

まちづくり運動のための史料紹介 6 大和国葛下郡東山村関係史料 大正4年(1915)上牧村他風俗誌資料 辻本正教

語る・かたる・トーク 221 (横浜国際人権センター刊, 2013.7) : 500円

「解放教育」継承への扉 18 お地藏さんに自分たちを重ねて 外川正明

語る・かたる・トーク 222 (横浜国際人権センター刊, 2013.8) : 500円

「解放教育」継承への扉 19 鹿の子絞りでひしゃげた爪 外川正明

語る・かたる・トーク 223 (横浜国際人権センター刊, 2013.9) : 500円

「解放教育」継承への扉 20 日雇いでしか雇われなかったのはなぜ 外川正明

かわとはきもの 164 (東京都立皮革技術センター台東支所刊, 2013.6)

靴の歴史散歩 109 稲川實

中世アジアの皮革 3 日本 竹之内一昭

皮革関連統計資料

京都部落問題研究資料センター通信 32号 (京都部落問題研究資料センター刊, 2013.7)

報告 2013年度前期部落史連続講座

映画の紹介 「くちづけ」(監督・堤幸彦, 脚本・宅間孝行) 渡辺毅

収集逐次刊行物目次(2013年4月~6月受入)

グローブ 74 (世界人権問題研究センター刊, 2013.8)

村の信心、家の信心、女の信心 高橋大樹

「障害女性」の問題を可視化する~あるシンポジウムから~ 松波めぐみ

人権の“館” 川崎市ふれあい館・多文化共生センター 仲尾宏

藝能史研究 201 (藝能史研究会刊, 2013.4) : 1,800円

人形浄瑠璃文楽の通し上演 内山美樹子

古典芸能と文化行政—人形浄瑠璃文楽をめぐる— 斉藤利彦

資料 藝能史研究会の仕事 2 1963年4月~2012年12月

『日本の古典芸能』総目録/『日本庶民文化史料集成』

総目録/『日本芸能史』総目録/ソノシート『音でつづる国民の歴史』細目/久多の花笠踊 調査報告書 目次/テレビ映画『四国の芸能』細目

国際人権ひろば 110 (アジア・太平洋人権情報センター刊, 2013.7) : 350円

特集 日本の人権条約の実施状況

国際人権ひろば 111 (アジア・太平洋人権情報センター刊, 2013.9) : 350円

特集 表現すること

LGBTが働きやすい職場をつくる 村木真紀

コリアNGOセンターNews Letter 33 (コリアNGOセンター刊, 2013.7)

特集 日本の排外主義とヘイトスピーチ

こるむ 16号 (在特会らによる朝鮮学校に対する襲撃事件裁判を支援する会刊, 2013.9)

裁判判決を前に オモニたちのリレーエッセイ

佐賀部落解放研究所紀要 30 (佐賀部落解放研究所刊, 2013.3)

朝鮮時代の身分制度概観 孫承言

史料紹介 武内了温の歩み 2 白石正明

狭山差別裁判 440号 (部落解放同盟中央本部中央狭山闘争本部刊, 2012.11) : 300円

野間宏と寺尾判決 17 庭山英雄

狭山差別裁判 441号 (部落解放同盟中央本部中央狭山闘争本部刊, 2012.12) : 300円

野間宏と寺尾判決 18 庭山英雄

狭山差別裁判 442号 (部落解放同盟中央本部中央狭山闘争本部刊, 2013.1) : 300円

収集逐次刊行物目次 (2013年7月～9月受入)

～各逐次刊行物の目次の中から部落問題関係のものを中心にピックアップしました～

IMADR-JC通信 174 (反差別国際運動日本委員会刊, 2013. 7) : 750円

特集 試される日本・国連での審査続く

ウィングスきょうと 117 (京都市男女共同参画推進協会刊, 2013. 8)

図書情報室新刊案内

中脇初枝再話『女の子の昔話 日本につたわるとっておきのはなし』／赤松良子著『時代を視る2004～2012 別冊女性情報』

ウィングスきょうと 118 (京都市男女共同参画推進協会刊, 2013. 10)

図書情報室新刊案内

『かあさんはどこ?』(クロード・K・デュボワ作/落合恵子訳)／『妊娠～あなたの妊娠と出生前検査の経験をおしえてください』(柘植あずみ・菅野摂子・石黒真理共著)

解放新聞 2626号 (解放新聞社刊, 2013. 7. 8) : 90円
今週の1冊 『なぜ即時原発廃止なのか』(西尾漠著)

解放新聞 2627号 (解放新聞社刊, 2013. 7. 15) : 90円
解放の文学 87 正田篠枝 原爆歌集 『さんげー原爆歌人 正田篠枝の愛と孤独』 音谷健郎

今週の1冊 『写真集 ネイティブ・アメリカ』 鎌田遵

解放新聞 2628号 (解放新聞社刊, 2013. 7. 22) : 90円
今月の本@ランダム

『柳田国男を読む』(赤坂憲雄著)／『(株) 貧困大国 アメリカ』(堤未果著)／『市民がメディアになるとき』(小山帥人著)

解放新聞 2629号 (解放新聞社刊, 2013. 8. 5) : 90円
ぶらくを読む 81 ケガレ論の現在 2 実感を得にくい時代のケガレ論 湧水野亮輔

解放新聞 2631号 (解放新聞社刊, 2013. 8. 19) : 90円
解放の文学 88 プラムディア著『日本軍に棄てられた少女たち インドネシアの慰安婦悲話』 音谷健郎

解放新聞 2632号 (解放新聞社刊, 2013. 8. 26) : 90円
麻生副総理兼財務大臣の発言に対する抗議声明 部落解放同盟中央本部

今月の本@ランダム

『樺野川の藍 小説・山口県水平社の夜明け』(宮本誠著)／『証拠改竄 特捜検事の犯罪』(朝日新聞取材班著)／『女たちの韓流—韓流ドラマを読み解く』(山下英愛著)

解放新聞 2633号 (解放新聞社刊, 2013. 9. 2) : 90円
溝手顕正・自民党参議院会長の差別発言に対する抗議声明 部落解放同盟中央本部

今週の1冊 『ぼくは満員電車で原爆を浴びた』(米澤鐵志語り, 由井りょう子文)

解放新聞 2634号 (解放新聞社刊, 2013. 9. 9) : 90円
主張 ネット・高齢化社会にも対応した「解放新聞」の改革などで論議しよう

ぶらくを読む 82 21世紀の新しい平等社会は現実に可能なのか 湧水野亮輔

解放新聞 2635号 (解放新聞社刊, 2013. 9. 16) : 90円
解放の文学 89 朝治武『差別と反逆—平野小剣の生涯』 音谷健郎

解放新聞 2636号 (解放新聞社刊, 2013. 9. 23) : 90円
今月の本@ランダム

村上紀夫著『まちかどの芸能史』／五木寛之, 沖浦和光著『境界の輝き 日本文化の深層をゆく』／宮武外骨著『震災画報』

解放新聞京都版 963号 (解放新聞社京都支局刊, 2013.

事務局よりお知らせ

◇11月より部落史連続講座Ⅱを開催します。今回は、京都にゆかりのある人物をとりあげてご講演をいただきます。是非ふるってご参加ください。

◇当資料センターではメールマガジンを毎週発行しています。「定期刊行物目次速報」・「新着図書情報」・「催し物情報」・「人権関係テレビ番組情報」をメールでお送りします。ご希望の方は、ホームページ (<http://suishinkyokai.jp/shiryo/index.html>) 上で登録してください(無料)。10月第1週現在の発行部数は555部です。是非、お読みください!

□所在地 〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター3階

□TEL/FAX 075-415-1032

□URL <http://suishinkyokai.jp/shiryo/index.html>

□開室日時 月曜日～金曜日 第2・4土曜日 11時～17時(祝日・木曜(月2回)・年末年始は休みます)

□交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口」駅(京都駅より約10分)下車 北へ徒歩5分